様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２１１６８

研究課題名（和文）宗教を取り入れた道徳教育による人間形成の理論と実践に関する研究

研究課題名（英文）Study on theory and practice of human formation through religious moral education

研究代表者
広瀬　悠三（Hirose, Yuzo）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：５０７３９８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、良心と信頼という概念に着目し、宗派にとらわれない開かれた宗教的な道徳教育の内実と意義を明らかにした。（1）良心とは自分とは異なったもう一人の自分との対話において現出するが、良心への自覚を通して、自分の複数性を実感し、さらに他者の多様性へと開かれることで寛容さという道徳性を獲得するようになる。（2）また信頼はいままで教育学では主題化されてこなかったが、教師と子どもには非対称的な人間形成力としての信頼が両者を取り結ぶように生起するのであり、そこでは合理性を超えた存在への関わり、さらには水平的な信頼において身近な超越性に触れることができるようになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
道徳が特別教科化され、道徳教育が改めて多面的に吟味されていているが、そこにおいて最も欠けていることの一つは、宗教と道徳教育の関係が不明確であるということである。本研究は、宗教とは単に宗派内の事柄だけでなく、様々な宗派にも通底し、一般的かつ現実的にも捉えることができる良心と信頼という問題が、宗教という超越的世界へと関わる重要な契機になっていることを明らかにした点で、道徳教育を新たな視点から補強することに貢献するものであると思われる。宗教を考慮に入れない道徳教育は、利益や成果追求の科目へと堕する危険性を孕んでおり、その危険性を回避するうえでも本研究は意味のある示唆を提供することができると思われる。

研究成果の概要（英文）：This project clarified the contents and meanings of religious moral education, which is not regulated to specific religions, by means of focusing on the idea of conscience and trust. 1) Conscience emerges in a dialogue between I and another I. Through self consciousness of this conscience, children feel their pluralities as well as diversity of others so that they can acquire a tolerance as a base of morality. 2) Trust, which has not been sufficiently investigated in a field of pedagogy, appears as an asymmetric power of human formation in a connection between teachers and children. In this place, children concern existence beyond rationality and furthermore can touch ordinary transcendent existence with a horizontal trust.

研究分野：教育学

キーワード：良心　寛容さ　カント　信頼　ボルノウ　ランゲフェルト　友情　歓待

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

特定の宗派教育としての宗教教育（キリスト教教育、仏教教育等）の研究が多い中、公教育の実践を想定する本研究は、各宗派宗教の基盤をなす宗教性（自己の力を超えた崇高なものを尊重するあり方）を形成する宗教教育に基づく道徳教育を考察するものである。この宗教性を形成する宗教教育による人間形成についての研究動向の特徴としては、以下の 3 点が挙げられる。(1) 合理的な自己を超えて、超越的な生命との関わりから人間の変容と形成を考察する研究（P. Standish, *Beyond the Self*, 1992)、(2) スピリチュアルな世界と関わる人間の形成に関する研究（J. Miller, *Holistic Learning And Spirituality In Education*, 2005)、(3) 異質な宗教をもつ人々がともに社会を築くことを促す市民性の教育に関する研究（A. Seligman, *Religious Education and the Challenge of Pluralism*, 2014)。しかしこれらいずれにも欠けているのは、宗教が道徳教育にとってどのような人間形成的意味を有しており、さらにそのような理論的考察がどのように現実の道徳教育の実践に結びつくかという考察である。それに対して本研究は、ヨーロッパと日本における道徳教育の理論的支柱をもなすカントの道徳的人間形成における宗教の役割を検討し、さらには良心と信頼を基軸に据えた実践形態としてドイツの私立学校の宗教教育を考察することで、日本にも適用しうる理論と実践の融合した道徳教育における宗教のあり方を解明する。

２．研究の目的

本研究は、「宗教を取り入れた道徳教育による人間形成の理論と実践」に関するものである。子どもの凶悪事件が後を断たず、2018 年度から特別教科化される日本の道徳教育では、命の教育に関連して宗教を扱う授業が模索されており、また世界に目を向ければ、宗教を一つの契機として対立が噴出している中、教育の場での異なる宗教への関わりが大きな問題になっている。いずれも単なる宗教教育ではなく、道徳教育との関連において宗教を捉えることが喫緊の課題となっている。本研究は道徳教育における宗教の役割を、世界的に道徳教育に影響を与えているカントの教育論を中心に、ルソーやバゼドウにも関連させながら理論的に意味づける。また特定の宗派によらずに宗教教育を行う方策の契機として、良心と信頼そして日常生活と精神生活を統合する地理の学びに注目し、これらの形成が子どもへの宗教教育にどのように影響を与えるかを考察する。そのことを通して、さらに宗教を取り入れた道徳教育の理論と実践について検討を試みる。

３．研究の方法

文献の読解と解釈が主な研究方法となる。その際、とりわけ (1) カントの宗教的な道徳教育の歴史的背景に関しては、ドイツで資料収集したドイツ宗教教育史の必須文献（B. Roebben, *Religionspädagogik der Hoffnung*, 2011 等）を頼りに、最新の宗教教育史を踏まえて、カントの宗教的な道徳教育の生成過程を明らかにする。またカントの批判哲学を、経験的な学としての他の著作と関連づけることで、包括的な人間形成について考察を深める。さらに、カントの地理教育による宗教的寛容性の形成の意味を自然地理学講義関連の著作をもとにして明らかにする。(2) 信頼については、ボルノウの関連する著作と、ランゲフェルトの子どもの人間学に関する著作、さらには信頼の教育・人間形成的意味にとって非常に重要となるアン・サリバンとヘレン・ケラーのかかわりを、著作や伝記等を用いて検討する。信頼の宗教的な道徳教育的意味については、教育学の領野という独自性を際立たせるために、他の領域における信頼についての議論を押さえることも重要となるように思われるため、学際的な信頼研究の考察もある程度踏まえる。

４．研究成果

4-1. カントの良心の宗教的人間形成と寛容の地理的人間形成

カント哲学において宗教とは、自らの道徳的な義務を最高善を実現するために要請される神の命令とみなすことであるが、現実的な人間形成の場で見れば、道徳性を顧慮しながら自然にふさわしい形で早いうちから宗教を子どもに教える必要がある。子どもは自らの良心が利益を追求せずに行為しようとする性質を有していることに心震わせ、現実を超えた超感覚的な世界へと触れるようになる。しかし同時に、このような良心の体験と自覚を通した宗教的な世界への参入は、独断的な行為ではなく、他の多様な宗教を知ることで、共通した良心的営みが存在することを実感するようになる。こうして、宗教的な体験が、寛容な態度へと結びつき、現実の他者と結びつきうる根源的な行為を促すことができるようになる。

このような寛容さをはぐくむ最大の教育的行為は、自己主義、利己主義と対置される複数主義を標榜する地理教育によって促進されることは非常に重要である。なぜなら、寛容さは

しばしば抽象的な心的態度と同一視され、具体的な形成作用は等閑に付される傾向にあるからである。地理教育は、認識の形成を有機的に他の諸能力と諸対象と連関させて行うことに大きな独自性があり、下級の悟性能力である感性、記憶力、構想力を、上級の悟性能力である悟性、判断力、理性と結びつけて教化することで、批判的思考力までも形成するようになる。これは、知と行為を結びつける複数主義的実践であり、単なる道徳教育を超え、超感覚的な世界までも含みこんだ世界市民的教育を促進するものであることが明らかになる。このことの成果の一部は、広瀬悠三『カントの世界市民的地理教育―人間形成論的意義の解明』（ミネルヴァ書房、2017 年）と広瀬悠三「多様性と寛容さを求める教育」（鈴木・山名・駒込編著『教職教養講座　第 2 巻　教育思想・教育史』（協同出版、2018 年、55-74 頁）における考察に結実された。

4-2. 教育学における信頼の独自性とその宗教的道徳教育への示唆

4-2-1. 非対称的人間形成力としての信頼

教育学における信頼は、政治学や経済学、また心理学といった分野のように、人間一般を扱っているわけではなく、教育関係が問われる場において、教師と子ども、あるいは保護者と子どもという、非対称的な関係における信頼が議論の俎上に載せられる。とくにボルノウとランゲフェルトの信頼論を丁寧に検討する中で、子どもは教師の様々な性格や能力を意識的・無意識的に吟味したうえで、信頼しようとするのに対して、教師は、そのような条件的な信頼を超えた信頼を子どもに向けるという特性があることが浮き彫りにされる。というのも、アン・サリバンとヘレン・ケラーの実践を踏まえ、教師は不完全な子どもの条件を吟味し、それに合わなければ信頼できないとして、子どもを切り捨てない（切り捨てるべきではない）と捉えられるからである。つまり教育学における信頼は、事実問題だけでなく当為問題として信頼が意味づけられるのである。その信頼は、子どもがいかに悪く、また頼ることができなくとも、それでも信頼し続けるという過剰かつ法外な信頼であり、その信頼が、子どもの学習能力だけでなく人間形成力を高めることに寄与するのである。

この過剰かつ法外な信頼は、従来の対等な人間関係からは現出しない、特殊な構造を有している。というのも、条件づけられない信頼を自ら他者である子どもに向けることができるためには、それほどまでに自分自身を他者との関係を超えたところで肯定していなければ現実的に自己を存在保持できないからである。ここに、教師が現実の他者ではない存在によって肯定・受容されていることの必然性が見いだされる。それは、超越的な存在との関係であり、ここにおいて、教師は宗教的な世界と触れ合うことになる。そのような教師の信頼に接する子どもは、教師が過剰かつ法外に信頼するという行為自体に、合理的な関係では説明できない非合理的な超越的存在を感じ取るようになる。こうして、子ども自体も、条件づけられない信頼行為へと自らを向かわせようとする営みが現出するようになるのである。こうして、信頼は、教師の宗教的な行為としての信頼を通して、子どもを現実的関係を超えた支えのもとに、他者と関わりをもとうとする、宗教的な道徳教育の一端を見ることができるのである。

4-2-2. 日本的関係性の根本をなす信頼

日本独自な倫理学を打ち出している、和辻哲郎は、主著の一つ『倫理学』において、人間と人間の間柄に着目して、人間関係から人間の倫理を抽出しようと試みているが、その基盤を信頼においている点は注目に値する。和辻にとって、信頼とは、個人から出発し、その個人が他者と様々な障害を乗り越えて関係を結ぶ中で現れるものではない。つまり個人という主体を前提にして、そこから信頼を考えるのではなく、もともと人間が生きる場所においてみられる基本的な関係、つまりは警察官がいて、店員がいて、教師という役割を担う人がいる、という関係性においては、その職務を遂行するということ自体が、信頼によって成り立っていると解釈できるのである。われわれは警察官を、法から逸脱した行為を取り締まる職務を遂行する存在としてはじめから信頼しているし、教師を、子どものことを考えて、子どもの成長と発達を促す存在であると信頼して理解している。このように、信頼とは努力した結果はじめてもたらされるような究極的な目的のような理念ではなく、むしろ人間が他者と生きているその場所のただなかで、すでに信頼が埋め込まれていると捉えられているのが、日本の倫理の基本的特徴である。このことがより明確になるのは、ボルノウの信頼が、苦難の末にかろうじて獲得されうるものであると理解されていることや、ランゲフェルトによって大人らしさの条件の一つとして、信頼が捉えられていることと対比されることによってである。

この日本の倫理学における信頼論は、彼方に信頼といった星を見るのではなく、いまここの関係において信頼を洞察することをわれわれに要請していると言える。このことは、信頼という非合理的な行為が、身近な営みに組み込まれていることであり、つまりその身近なところにこそ宗教的・神秘的営みが含まれていることを示唆するものである。これは日本独自の自然宗教観にもつながるところであり、日本の独自の宗教的な道徳教育を考える上でも、

示唆に富むものであると思われる。

4-2-3. 水平的な信頼の教育学的意義

信頼の考察を主題的に行った、ボルノウとランゲフェルトは、ともに教育人間学という領野において、教育と人間形成における信頼を解明した。しかしこの考察には一つの傾向とそれに付随する欠点が存在する。すなわち、信頼を時間的な枠組みで垂直的にのみ考察しているという点である。教師と子ども、また保護者である親と子どもにおける信頼は、時間的に差異も前提されている非対称的な関係であり、そのような非対称性を解体した関係における信頼の人間形成的意味が考慮に入れられていないのである。これは、ボルノウとランゲフェルトが歴史的人間学の影響を受ける中で、人間の形成を考察しており、そのような文脈において教育における信頼が吟味されているということを意味している。

それに対して、本研究では、この垂直的な信頼の独自性は認めるにせよ、それとは別の水平的な関係、つまり友人や自分自身、さらには事柄への信頼というものを通して、人間がどのように変容していくのかも考察対象に据えた。ここでは、友情の不可思議さを成り立たせているものが、理由のない信頼であるということ、さらにはこの信頼が他者を無条件で受け入れる歓待に密接に関係していることを、デリダの歓待論をもとに明らかにした。そしてその友人の歓待は、友人に身をゆだねる自分自身への歓待と信頼を同時に伴うことを、エマソンの自己信頼の考察を援用しながら論証した。さらにはこの信頼は、自分が依拠する事柄、例えば自分がかかわっている職業や仕事、作業などへの信頼にまで行きつくことを明らかにし、このような水平的な信頼が、まさに身近にみられる信頼行為を支えていることから、日常という生活において、そこにとどまらない奥行きを有する信頼に触れることで、他者とともに超越的な存在の両方に肯定的に働きかけることを促すことを解明した。こうして水平的な信頼を考慮に入れることで、日本の倫理学に通ずる道を確保することができ、現実的な日本の宗教に基づく道徳教育を生み出す契機になることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 Not Cosmopolitan Education, but Educational Cosmopolitanism: From and for Geographical Children
３．学会等名 International Network of Philosophers of Education 16th Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 Trusting rather than Understanding Others: Another Intercultural Cosmopolitan Education
３．学会等名 International Conference on Multiculture and Education 2018（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 Moral Education with Religiosity? Rethinking Moral Education for a Caring Society
３．学会等名 Association for Moral Education 44th Annual Conferenice 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 Trust as a Matrix of Japanese Cultural Relationships
３．学会等名 Second Workshop on Educational Research between TU Dortmund and Kyoto University（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 A sophisticated rather than naïve trust: An attempt at constructing moral education for a democratic society
３．学会等名 Association for Moral Education（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuzo Hirose
２．発表標題 Thinking with Conscience: Another Aspect for Cosmopolitan Education
３．学会等名 International Network of Philosophers of Education, 15th Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 小山虎（編）	４．発行年 2018年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 354
３．書名 信頼を考える－リヴァイアサンから人工知能まで	

１．著者名 鈴木晶子・山名淳・駒込武（編）	４．発行年 2018年
２．出版社 協同出版	５．総ページ数 338
３．書名 教職教養講座　第2巻　教育思想・教育史	

１．著者名 広瀬悠三	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 420
３．書名 カントの世界市民的地理教育―人間形成論的意義の解明	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考